

<p>研究課題名 間質性肺炎合併肺癌に対する化学療法レジメンの安全性の検討 -急性増悪のリスク因子の検討を含めて-</p>
<p>研究責任者名 広島大学病院呼吸器内科 助教 益田 武</p>
<p>研究期間 2016年6月29日(倫理委員会承認後)～2021年3月</p>
<p>対象者は以下の全てを満たす患者さんです。</p> <ol style="list-style-type: none"> 2003年1月から2018年4月までに当院で肺癌の確定診断が得られ、根治的手術が困難であるために化学療法が施行された患者さん CT検査で間質性肺炎と診断された患者さん
<p>意義・目的</p> <p>間質性肺炎に合併した肺癌患者さんが抗がん剤を投与される場合に、間質性肺炎が急激に悪化し、致命的な転帰をとられることがあります。そこで、間質性肺炎を合併した肺癌患者さんに抗がん剤が投与される場合には、間質性肺炎の急性増悪がおこりにくく、安全に投与できる薬剤が選択される必要があります。ただ、間質性肺炎を合併した肺癌患者さんに抗がん剤が投与される際に、間質性肺炎の急性増悪発症と関係のある因子は不明です。</p> <p>以上の背景を踏まえて、本研究では間質性肺炎を合併した肺癌患者さんに対して投与された抗がん剤による間質性肺炎の急性増悪発症の頻度と、抗がん剤による間質性肺炎の急性増悪発症と関係のある因子を明らかにすることを目的としています。</p> <p>本研究結果から、間質性肺炎を合併した肺癌患者さんに対して安全に使用できる抗がん剤が明らかとなるものと考えられます。また、間質性肺炎を合併した肺癌患者さんに抗がん剤を投与すべきかどうかを判断する際に必要とされる間質性肺炎急性増悪発症の危険因子が同定されるものと考えられます。</p>
<p>方法</p> <p>本研究は、診療録(カルテ)から得られた臨床データを利用して研究を行います。まず肺癌患者さんに投与された抗がん剤毎の効果と間質性肺炎急性増悪の頻度を検討します。続いて、間質性肺炎の急性増悪の発症に関わる因子を明らかにするため、間質性肺炎の急性増悪を発症した患者さんと発症しなかった患者さんの間で、年齢や性別、喫煙歴、Performance Status、病期、KL-6値、肺機能、気腫の合併、間質性肺炎のCTパターン、HRCT所見に差がないかを検討します(個人を特定可能な情報は解析に用いません)。</p>
<p>共同研究機関</p> <p>ありません。研究責任者 広島大学病院 益田武が解析をします。</p>
<p>試料・情報の管理責任者</p> <p>広島大学病院 助教 益田武</p>
<p>個人情報の保護について</p> <p>調査内容につきましては、プライバシー保護に十分留意して扱います。情報が個人を特定する形で公表されたり、第三者に知られたりするなどのご迷惑をお掛けすることはありませんのでご安心ください。</p>

研究に臨床データや試料を提供したくない場合はお申し出ください。お申し出いただいても不利益が生ずることはありません。

問合せ・苦情等の窓口

〒734-8551 広島市南区霞 1-2-3

Tel : 082-257-5196

広島大学病院呼吸器内科 助教 益田 武